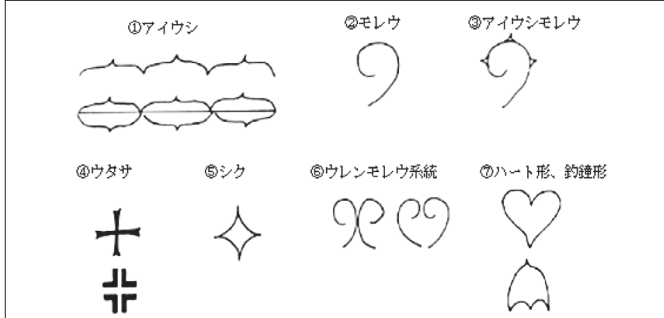


河野コレクションからみる文様 およびその特徴 —樹皮衣・木綿衣を中心に—

五 関 美 里

1. 問題の所在

アイヌ衣服は、アイヌ民族に伝わる伝統的な衣装として知られている⁽¹⁾。とくに文様入りの衣服は、主に晴着として着用されていた。現在では、北海道の白老町や、阿寒湖周辺などの地域で行われている観光向けイベントのなかで見られる事が多い。観光地では、イベントで行われる儀礼や舞踊の際に、文様入り衣服が着用されている。このようなアイヌ衣服に付けられる文様は、一般にアイヌ文様 (ainu-siriki)⁽²⁾ と呼ばれるものであり、従来の研究では、文様の形状ごとに分類がなされている⁽³⁾ (第1図)。



第1図 アイヌ衣服に付けられる文様の形状
〔出所〕 児玉作左衛門他(1968):「アイヌ服飾の調査」北海道教育委員会『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 p.82、アイヌ文化保存対策協議会編(1969):『アイヌ民族誌』上巻 第一法規 p.227 を参考に作成。

文様が付けられるアイヌ衣服は、衣服の素地ごとに、獣皮衣、魚皮衣、樹皮衣、草衣、木綿衣などの種類が存在するが、一般にアイヌ文様と呼ばれる、アイウシやモレウなどといった文様が使用される衣服は、樹皮衣と木綿衣のみにみられる。また、アイヌは古くから交易の民であり、アイヌ文化はこれまで様々な他民族との接触・交流によって形成されて

いる。なかでも、北海道に居住するアイヌにおける衣服の文様とその構成は、近世以降に、和人たちからの影響を強く受けたことによって発展した文化と推察できる。その理由として考えられるのは、第一に、木綿衣の衣服の素地となる木綿の普及が挙げられる。木綿は、樹皮で作られた樹皮衣よりも生地が柔く、刺繍が施しやすい点が特徴である。このような木綿の普及により、アイヌの女性たちによる刺繍は、従来よりも施しやすくなり、衣服へ付ける文様構成の多様化にも繋がった可能性がある。

第二に、アイヌは和人などの他民族との交易をしていた。一方で、18世紀から商人にアイヌとの交易を請け負わせた制度である場所請負制度により、漁獲物の増加を図った商人によって漁場の労働力として過酷な労働を強いられていた歴史がある。このような和人との接触・交流の歴史背景をみると、強制移住や婚姻などの理由から、後述するように、刺繍技術を持つアイヌ女性たちの移動がみられる。アイヌ衣服における文様の刺繍技術は、一般に、女性が刺繍を行うため母方の系統で相続される母系である。そのため、コタン内の数名が移住を行うと、その中に含まれるアイヌの女性たちによって、移住先の地域の文様構成にも影響を及ぼしている可能性が考えられる。

従って、本稿では、木綿の普及や強制移住に伴う文様刺繍技術の伝播といった上述の2点の理由などから、とくに多様な種類の文様入り衣服が作られたとされる北海道に居住するアイヌにおける樹皮衣・木綿衣の文様を中心に検討する。

アイヌ衣服やその文様に関する先行研究では、昭和16(1941)年に、金田一京助と杉山壽榮男によって記された『アイヌ藝術』のなかで、初めて本格的な衣服の調査・検討が行われた(金田一・杉山1941)。さらに、その後、児玉作左衛門を中心に、文献や地域ごとの実地調査から研究が行われ(児玉1965、児玉他1968など)、とくに昭和43(1968)年『アイヌ民俗資料調査報告』の中で記された、児玉作左衛門ら4名による「アイヌ服飾の調査」では、北海道内の地域ごとにみられるアイヌ衣服とその文様などに関する詳細な調査・研究⁽⁴⁾が行われた。近年では、アイヌ衣服に関して平成16(2004)年に、津田命子がアイヌ衣服と文様の変遷を研究しており(津田2004など)、同時に、アイヌ衣服の複製方法・刺繍方法も含めて、全体像が捉えられるようになっている。また、平成14-19(2002-2007)年にかけて、本田優子が主に文献史料から、樹皮衣

であるアットゥシを中心とした研究を行っており（本田 2002 など）、平成 19（2007）年には、斎藤祥子、藤田和佳奈によって、アイヌ衣服に使われる文様の役割に関する研究がなされている（斎藤・藤田 2007）。

以上のように、衣服の研究は行われているものの、文様に関しては焦点を当てた研究は少ない。衣服における文様を研究するためには、とくに衣服資料の資料情報を明らかにする必要がある。しかし、以下に述べるように問題点が挙げられる。

アイヌ文様に関する研究は、衣服の製作地域や製作年代が不明な衣服が多かったことから、衣服およびその文様に焦点を当てた研究が少なく、文様の成り立ちや系譜に関する研究は、未だ憶測の域を脱していないのが現状である。上述した衣服資料に関する基礎的データの乏しさの理由として考えられる理由は、次の通りである。すなわち、当時の収集家たちが、収集した衣服の製作地域や製作年代を記録せずに、主に鑑賞目的（美術品）などとして個々によって収集されていたためである。⁽⁵⁾

一方で、国内に存在するアイヌ関連コレクションの中でも、河野コレクション（旭川市博物館所蔵）は、北海道史や考古学、アイヌ研究者である河野常吉（1863 年 -1930 年）と、その子である河野広道⁽⁶⁾（1905 年 1 月 17 日 -1963 年 7 月 12 日）、孫にあたる河野本道（1939 年 -2015 年 3 月 2 日）によって収集されたコレクションである⁽⁷⁾。本稿でアイヌ衣服の文様の比較・検討を行うにあたり、数あるアイヌコレクション⁽⁸⁾の中から同コレクションを取り上げた理由は、次の通りである。

- ①研究者によって収集された衣服資料であるため、衣服の収集地、収集者、製作者、入手先などの記録が比較的残っており、信憑性が高い。
- ②保存状態が良好なものが多い。
- ③これまで河野コレクションの衣服を用いて、文様の比較・検討している事例はほとんど見られない。
- ④何点かの衣服が旭川で収集したものであると判明しているため、地域差を検討する際の目安になる。

上述した①～④のなかでも、とくに①で述べた「研究者によって収集された衣服資料である」という点が、本資料を選択した最大の理由といえる。すなわち、アイヌコレクションの中でも河野コレクションは収集者が研究を目的として資料を収集していたため、収集地などの詳細な情報とともに記録・収集されており、資料情報の信憑性が高い。

以上のことから、本稿では河野コレクションの衣服を用いた文様の検

討を行う。その際、同じく昭和期頃の衣服である可能性の高い衣服資料をもつ土佐林コレクション（早稲田大学會津八一記念博物館所蔵）との比較を行うこととする。両コレクションの比較で得られる成果は、次の通りである。昭和期頃に製作・収集が行われた土佐林コレクションと、同じ昭和期頃に収集が行われた河野コレクションとの比較によって、同時期における北海道内の他地域の樹皮衣・木綿衣の文様構成の比較が可能である。とくに、河野コレクションには、旭川で収集したものが9点、樺太2点、下北半島太平洋岸1点、白老1点などの収集地が判明している衣服がある。そのため、土佐林コレクションの衣服に多く見られる、日高、白老地方などの地域との比較が可能である。両コレクションの比較を通して、主に、昭和期における各地域のアイヌ衣服の文様と、その文様構成の特徴が検討できると推察した。

本稿では河野コレクションの衣服および文様を研究対象とし、さらに、同時期・同地域の資料が多いと考えられる土佐林コレクションのアイヌ衣服との比較・検討も含め、両コレクションからみた昭和期におけるアイヌ衣服と文様の特徴に関する検討を行う。

2. 樹皮衣・木綿衣のアイヌ衣服 39 点の比較・検討

(1) 旭川地方を中心としたアイヌ衣服とその文様

河野コレクションの衣服 39 点をみると、収集地が判明しているものがいくつかある（第1表）。第1表をみると、旭川で収集された衣服は、資料番号 65、70、80、90、95、98、101、102、103 の9点で、資料番号 65、70 は植物のシナで織られたアットウシ（樹皮衣）である。とくに、資料番号 70 は子ども用の衣服であったとされ、子ども用にも刺繍入りのアットウシが作られていることが分かる。この衣服をみると、大人とほぼ同様の文様構成になっており、子どもと大人による文様の差異はあまりみられない。

また、資料番号 80 の大きな白布を切り抜いて背全面に配置された衣服は、土佐林コレクションの日高地方の衣服と文様構成が類似している印象を受ける。このような文様構成が似ている要因としては、過去に人や集落の交流・移動があった可能性がある。

さらに、旭川で収集された衣服である資料番号 90、95、98、102、103 は、いずれも刺繍衣で、その他、資料番号 102、103 は黒裂の上に刺繍が施

第1表 河野コレクションの衣服

項目	旭川市博物館 所蔵品目録に おける登録番号 と資料番号	資料 番号	衣服の 各部分	単位文様						寸法(cm) 身頃×裾	a.収集地、収集者 b.製作者 c.入手先	収蔵年月日	備考	出所
				アイ ウシ ン	モ レ ウ	ウ タ サ	ウ レ ン モ レ ウ 系 統	そ の 他 (ハ ー ト 形、釣 鐘 形など)						
65	No.413 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	112.0×58.5	a.旭川 b.砂沢ペラモンコロ c.砂沢ペラモンコロ	昭和29年4月20日	材質はシナ。筒袖。	p.7	
66	No.5026 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	109.0×57.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はオセウ。もじり袖。	p.8	
67	No.4147 樺太アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	119.0×61.0	a.樺太、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はイラクサ。	p.9	
68	No.4142 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	118.0×61.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はオセウ。筒袖。	p.10	
69	No.4144 樺太アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(蓓花) ○(同上)	121.0×66.5	a.樺太、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はオセウ。もじり袖。 袴ビロード。	p.11	
70	No.7707 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(同上)	68.5×40.0	a.旭川ウ、河野広道 b.不明 c.阿地政美	平成8年10月13日	材質はシナ。子ども用。	p.12	
71	No.4143 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	124.0×70.5	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はシナ。広袖。	p.13	
72	No.4141 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	129.0×74.5	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質はハルニレ。広袖。	p.14	
73	No.443 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	117.5×65.0	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄蔵	昭和27年12月11日	材質は木綿。筒袖。	p.15	
74	No.7729 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	108.0×65.0	a.不明、不明 b.不明 c.不明	不明	材質は木綿。もじり袖。 「浦川金時」の記あり。	p.16	
75	No.7688 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	114.5×68.0	a.不明、不明 b.不明 c.不明	不明	材質は木綿。筒袖。	p.17	
76	No.4148 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	120.0×57.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。もじり袖。	p.18	
77	No.445 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	125.0×64.5	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄蔵	昭和28年7月13日	材質は木綿。筒袖。	p.19	
78	No.4151 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	114.5×62.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。もじり袖。	p.20	
79	No.7727 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	120.0×66.0	a.不明、不明 b.不明 c.不明	不明	材質は木綿。もじり袖。	p.21	
80	No.7726 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	123.0×65.0	a.旭川、不明 b.不明 c.門野ハルエ	昭和39年6月10日	材質は木綿。もじり袖。	p.22	
81	No.4154 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	120.0×61.5	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。もじり袖。	p.23	
82	No.7329 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(釣鐘) ○(同上)	129.0×62.0	a.下北半島太平洋岸、不明 b.不明 c.元禄(青森県)	昭和45年	材質は木綿。袴、裕、もじり袖。	p.24	
83	No.447 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	126.5×66.5	a.不明、不明 b.不明 c.鑑別ユキ	昭和30年5月16日	材質は木綿。「明治初年面顔のオウタンが着用したもの」もじり袖。	p.25	
84	No.442 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	117.0×62.5	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄蔵	昭和27年12月11日	材質は木綿。もじり袖。	p.26	

85	No.4145 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	113.0×61.5	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 筒袖。	p.27
86	No.4146 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	114.0×67.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 もじり袖。	p.28
87	No.444 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	115.0×62.0	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄藏	昭和28年7月13日	材質は木綿。 もじり袖。	p.29
88	No.4158 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	119.5×60.0	a.不明、河野広道 b.川村ムイシャマ c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は絹？	p.30
89	No.4152 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	119.0×61.0	a.白老、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 もじり袖。	p.31
90	No.686 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	120.5×62.5	a.旭川、不明 b.不明 c.門野ハルエ	昭和39年6月10日	材質は木綿。 袴。	p.32
91	No.7731 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	132.5×61.5	a.不明、不明 b.不明 c.不明	不明	材質は木綿。 もじり袖。	p.33
92	No.4153 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	113.5×62.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 筒袖。	p.34
93	No.4149 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	119.5×65.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 筒袖。	p.35
94	No.4155 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	130.0×66.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 筒袖、袴。	p.36
95	No.508 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	113.5×65.0	a.旭川、不明 b.荒井シャヌレ c.荒井シャヌレ	昭和33年3月3日	材質は麻。 筒袖、結納の品 (女性から男性へ)	p.37
96	No.414 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	117.5×64.0	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄藏	昭和27年12月11日	材質は木綿。 もじり袖。	p.38
97	No.5027 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	128.5×61.0	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 もじり袖、袴、袴。	p.39
98	No.446 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	119.0×63.5	a.旭川、不明 b.不明 c.荒井シャヌレ	昭和30年4月2日	材質は木綿。 筒袖。	p.40
99	No.432 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	130.0×63.0	a.不明、不明 b.不明 c.高木庄藏	昭和27年12月11日	材質は木綿。 筒袖。	p.41
100	No.4150 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	121.5×63.5	a.不明、河野広道 b.不明 c.河野本道	昭和47年5月15日	材質は木綿。 もじり袖、袴、袴。	p.42
101	No.687 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	120.5×62.0	a.旭川、不明 b.不明 c.門野ハルエ	昭和39年6月10日	材質は木綿。 筒袖、袴。	p.43
102	No.7732 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	116.5×72.0	a.旭川、不明 b.荒井ミツエ c.尾沢カンシャツク	昭和35年	筒袖、男物。	p.44
103	No.7728 北海道アイヌ	前身頃 後身頃 袖	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○(草花) ○(同上)	87.5×67.0	a.旭川、尾沢カンシャツク b.門野ハルエ c.尾沢カンシャツク	昭和30年	なし。	p.45

注) 衣欄の箇所は記述なし。旭川市博物館編(1997)：『旭川市博物館所蔵品目録 民族資料／衣服関係』旭川市博物館に掲載されていた民族資料のうち、文様入りの樹皮衣・木綿衣のみ(39点)を掲載した。なお、本文における資料番号は、表と同様の番号である。資料番号は、土佐林コレクション(資料番号1～64)、河野コレクション(資料番号65～103)である。

〔出所〕旭川市博物館編(1997)：『旭川市博物館所蔵品目録 民族資料／衣服関係』旭川市博物館

された形になっている。これらの文様をみると、特殊な形が多く使用されている。資料番号 69 は樺太で収集されたものであるが、それ以外の 82、88、90、95、98、101、103 など、旭川や本州の下半島で収集された衣服の多くは、釣鐘形のみならず、植物のツタや草花のようなものが配置されている。つまり、文様を見るところには、使用される文様がとくに多様化している様子がみられる。アイウシヤモレウといった文様が、植物の棘やツタのように刺繍され、先端には葉のような刺繍もされている。これは、ナナイなどアムール川流域の少数民族における衣服の文様とも類似している点である。

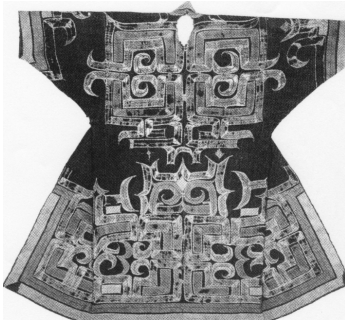
次に、河野コレクション資料番号 89（第 2 図）の白老で収集された衣服は、背上部と下部で、置かれた布が上下に切り離されている点が特徴的である。⁽⁹⁾また、資料番号 89（第 2 図）、85（第 3 図）をみると、背上部の文様は、四角く囲われた中にモレウが向き合わせて配置された形になっている。これは、土佐林コレクションの胆振地方の衣服と考えられる資料にも同様の構成が見て取れる。つまり、胆振地方の白老や虻田などの地域における文様構成の特徴は、日高や旭川の白布切抜文衣のように背面全体ではなく、上下に分かれている形がみられ、また、上部の文様は四角く囲われたウレンモレウが配されている構図が、白老周辺の地域に比較的多い特徴であるといえる。

背面上部と下部に分かれている文様構成の理由として考えられるのは、次のような要因が挙げられる。すなわち、「アイヌ服飾の調査」(1968)



第 2 図 河野コレクション・資料番号 89

[出所] 旭川市博物館編 (1997) : 『旭川市博物館所蔵品目録 9 民族資料／衣服関係』
旭川市博物館 p.31 より引用。



第3図 河野コレクション・資料番号 85

[出所] 旭川市博物館編 (1997) : 『旭川市博物館所蔵品目録9 民族資料／衣服関係』
旭川市博物館 p.27 より引用。

で、児玉らが調査した際に白老地方の古老から聞き取った「ルウンペの製作について」の部分には、材料である外来品の木綿や絹の入手が非常に困難であり、一年ごとに身頃の上部、裾（身頃の下部）、袖といった順に作り、一枚のルウンペを作製するには3年ほどかかっていたとされる（児玉他 1968 : 83）。「…（前略）…それでこの地方には上部、下部、袖部と刺繍は施されているがバラバラに保存されているものがしばしばみられる…（後略）」（児玉他 1968 : 83）とあるように、当時の材料の入手の困難さといったことから文様構成に違いが表れ、地域差が生じていることが分かる。

さらに、河野コレクションの資料番号 83 をみると、備考の欄に「明治初年函館のオイランが着用したもの」（旭川市博物館編 1997 : 25）と記されているものがある。このことから、アイヌ衣服が当時の函館、花魁などにも着用されていたことが分かる。花魁は、遊女の中でも位の高い者であるため、その花魁がアイヌ衣服を着用していたとすると、高価で貴重な衣服であったと推察できる。この函館の花魁がアイヌか和人であったかは定かではないが、和人が着用していたとすると、本州北部の漁師たちの間で作業着として着用されていた樹皮衣に対して、刺繍が施された木綿衣は、鮮やかな見た目から、女性たちの間でも好まれて着用されていたと考えられる。とくに、函館は和人の流入が激しく、この地域のアイヌ集落は早くに姿を消していたが、衣服については、残存していたかあるいは購入などによって得られていた可能性がある。

これまではアイヌの各家で着られるだけであった衣服が、上述のように和人などを相手に、徐々にアイヌ衣服の販売などの機会が増すと、刺繍を施す製作者側も、アイヌ衣服の商品としての価値を高めるために、より手の込んだ美しい衣服を作ろうとする。そのため、文様が多様化し、旧来の文様であるアイウシ、モレウに留まらず、釣鐘形やハート形、さらにはツタなどの草花といった意匠も付けられるようになった可能性がある。このことから、この時代の旭川などでは、衣服に刺繍する際には、古くからの伝統の文様構成を重視するよりも、新しい文様を取り入れた衣服が作られている様子がうかがえる。

河野コレクションと土佐林コレクションの衣服における文様の比較・検討を通して、衣服の文様構成は、地域によって違いが生じていることが判明した。とくに、日高、白老、旭川の3地域に以下のような特徴がみられた。

- ①日高は大きな白布を使用した白布切抜文衣が最も特徴的である。
- ②旭川の白布切抜文衣は、日高の文様構成と似た印象を受けるため、両者には何らかの関係性があり、過去に集落間の交流や移住の可能性がある。
- ③旭川の刺繍衣は、土佐林コレクションのアイヌ衣服には見られなかった、ツタ（草）、花などの文様が多く取り入れられている。昭和期頃の旭川には、このような草花など自然をモチーフとした文様を使用されている。
- ④白老の衣服は、上述したように背面の文様が上下に分割されている構成が特徴的である。この点は、日高、旭川と異なる特徴になっている。白老は、日高アイヌの一族が移住したのち、集落が形成された地域であるとされるが、その後、日高とは異なる文様構成をもつ衣服へと発展したと推測できる。

これまでの成果で判明していた点は、①の白布切抜文衣が日高の特徴である点と、④の衣服背面の文様構成が上下に分割している白老の特徴である。また、土佐林コレクションでは、草花をモチーフにした文様は一切見られず、釣鐘形、ハート形がみられた。

両コレクションの比較・検討で新たに分かった点は、旭川における衣服の文様の特徴である。上述の②、③のように、旭川の文様構成は日高と類似した印象を受ける。その要因としては、以下の点が推察される。すなわち、明治5、6（1872、1873）年頃に上川地方のアイヌとの交易を

目的に來た鈴木龜吉⁽¹¹⁾という商人が、漁村で日高アイヌの女性を娶り、明治 10 (1877) 年頃に、石狩川と忠別川との合流地点 (現地区名「龜吉」) に定住した (旭川市史編集会議 1994 : 770-771)。このことから、鈴木龜吉の妻となった日高アイヌの女性によって、この地に日高の特徴的な刺繡技法が伝わった可能性がある。

(2) 昭和期における 3 地域の特徴

昭和期の旭川では、草花といった文様を使用されている。これは、先述した通り、自然をモチーフとした文様が多いナナイなどアムール川流域の北方少数民族のもつ文様と類似している。この理由については、製作者が文様を使用する際に、他地域の衣服の文様を参考にするなど、他から情報を得ていた可能性があり、当時の通信など情報技術の発達なども一つの要因として考えられる。

以上のことをふまえ、河野コレクションと土佐林コレクションの比較から、主に、昭和期のアイヌ衣服における文様の特徴が明らかになったといえる。特徴は、以下の a～c の通りである。

- a. 第 1 表の文様の分類で「その他」とした、ハート形、釣鐘形などの文様は、土佐林コレクション、河野コレクションのどちらも共通して使用されているものがある。
- b. 旭川では、木綿衣に草花をモチーフとした文様を使用されている。
- c. 函館において、木綿衣が花魁に着用されており、花魁が和人であるとすると、文様入り衣服の着用がアイヌだけに留まっていない様子がうかがえる。

以上の点から、昭和期における北海道内のアイヌ衣服は、ハート形、釣鐘形に留まらず、草花といった新しい文様を使用した衣服が作られた時期といえる。筆者は、この草花の形をした文様を「草花形」と表現することとした。また、昭和期には、文様入りのアイヌ衣服がアイヌだけの使用ではなく、和人たちにも注目され、着用されていた可能性がある。つまり、昭和期におけるアイヌ衣服は、使用する文様においても製作者の自由度がうかがえ、ハート形、釣鐘形、草花形など、アイヌ語名称がなく、アイヌ固有の文様ではないと思われる文様の使用がみられる。また、衣服の着用の時の男女差や大人用・子ども用といった着用の違いも、この頃にはあまりみられず、和人たちにも着用されていたことから、着用の自由度が比較的高かったことが現段階ではいえる。

3. 結語

河野コレクションを中心にアイヌ衣服の文様をみると、どの衣服も背面の文様構成の特徴が目立っている。とくに、白老に多い背面上下分割の文様構成の中で、上部のウレンモレウは、「神の目（カムイ・シキ）」を表していると考えられている場合がある（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2017：194-195）。アイヌにおいて、カムイ（神）と呼ばれるものは動物に多い。そのため、背面上部ウレンモレウの文様構成が普及した地域では、カムイ（神）とされる動物への信仰と共通する可能性もある。しかし、この点に関しては、北海道教育庁社会教育部文化課編（1982）：『アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査 I 旭川地方）』北海道教育委員会など全 18 冊の調査報告書をみると、アイヌの動物送り儀礼として代表的なイオマンテの分布は、北海道内の道央、道東など広い地域に広がっていることが分かる。イオマンテは、一般にクマ祭り、クマ送りなどと呼ばれるアイヌの儀礼であり、アイヌにとって特に重要な神として崇められる動物に対して行われる動物送りのことである。このイオマンテなどにみられる動物信仰の分布と、衣服における文様の由来に関しては、繋がりが薄く、現時点では共通性があまりみられない。このことから、動物への信仰と衣服の文様の由来は必ずしも一致するわけではないと考えられる。

しかし、北海道内のすべての地域で使用される文様の形状は同じであっても、衣服の文様をどのように見るかは人それぞれであるため、文様を「神の目」とする人もいれば、全く別のものだとする場合もある。あるいは、河野コレクションの刺繍衣においては、動物よりもむしろ草や花の形の文様が多いことや、アイウシがアイヌ語で「棘のある文様」という意味であることから、アイヌ文様には自然のなかでもとくに植物との繋がりがある可能性もうかがえる。この点に関しては、今後の研究課題の一つとしたい。

本稿では、河野コレクションを中心に、その他、土佐林コレクションとの比較・検討も含めたが、数点の資料を比較しただけでも、北海道内において地域ごとにアイヌ衣服の文様に特徴がみられることは明白である。今後、地域差をより具体的に証明するためにも、衣服資料の詳細な分析・検討を行うことが必要である。さらには、旭川地方の特徴としてもみられた「草花形」の文様に関しては、ナナイなどの北方諸民族との

類似性もうかがえる。このような他民族との類似点も視野に入れつつ、文様の伝播経路に関しても文献などから調査・検討し、文様の地域的特徴に関する考察を深めていきたい。

注

- (1) 河野広道によると、アイヌは人種学上のアイヌと民族学上のアイヌで、その意味が異なると述べられている（河野 1972：251）。一般に、身体的特徴の違いを指す「人種」と、文化の相違によって異なる「民族」とに分類することができる。アイヌは、明治時代以降、和人と呼ばれる大和民族と同じ教育を受け、生活している。そのため、現在ではアイヌの血を引いたアイヌ系の人たちは残っているものの、文化的に生活内容において大和民族と区別がなく、大和民族としてのアイヌ系の人たちが北海道に残っているという現状である（河野 1972：254-255）。
- (2) 北海道の二風谷などの一部地域によってはアイヌ文様のことを「シリキ（siriki）」と呼ぶ場合もあるが、図録『北の紋様展』大塚和義執筆によると、アイヌ語には文様全体を指す言葉がないといわれている。これは、アイヌ文様の成立が、装飾性から生じたものではなく、霊的表象性に起因しているためであると考えられている（飯田・岡田 1992：4）。アイヌ文様において、明確なアイヌ語を持っているモチーフの基本的単位はアイウシ（括弧文）と、モレウ（渦巻文）の2種である（飯田・岡田：1992：4）。よって、本稿では、「シリキ」ではなく、アイヌ文様全体を指す語として「文様」の語を用いる。本稿における文様とは、アイウシ、モレウなどの単一文様や、アイウシモレウ、ウレンモレウといった単一文様が組み合わさり形成されたと考えられる複合文様などを指して「文様」と呼ぶ。なお、表記には、模様、紋様、文様と研究者によって違いがあるが、最も一般的に多く使用されている「文様」を使用する。
- (3) アイヌ文化保存対策協議会編（1969）：『アイヌ民族誌』上巻 第一法規では、アイヌ服飾文様の種類として、図で1. アイウシ、2. モレウ、3. アイウシモレウ、4. シッケウヌモレウ、5-7. ウタサ、8,9. シク、10. ウレンモレウ、11. シクウレンモレウ、12. アイウシウレンモレウ、13. シッケウヌウレンモレウ、14. アパポエプイ、15,16. アパポピラスケ、17. エトコ、18. プンカル、19. つりがね形が挙げられている（アイヌ文化保存対策協議会編 1969：227）。また、児玉作左衛門他（1968）：「アイヌ服飾の調査」北海道教育委員会『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会では、衣服の文様（シリキ）として、1. アイウシ・シリキ、2. モレウ・シリキ、3. アイウシモレウ・シリキ、4. シッケウヌモレウ・シリキ、5. ウレンモレウ・シリキ、6. シクウレンモレウ・シリキ、7. シッケウヌシクウレンモレウ・シリキ、8. ウタサ・シリキ、9,10. シク・シリキ、11. アパポエプイ・シリキを挙げている（児玉他 1968：82）。
- (4) 調査年は昭和 38 年（1963）～昭和 40 年（1965）頃に行われたもので、調査地域は日高地方の平取（紫雲古津、二風谷、荷負本村、貫気別）、門別（佐

瑠田)、静内(東静内、農屋、神森、新冠万世)、三石(富沢、福畑、蓬栄、越海)、様似(岡田)、浦河(姉茶、野深)、上川地方の近文、北見地方の美幌(野崎)、釧路地方の屈斜路、阿寒、十勝地方の伏古、音更、石狩地方の千歳、胆振地方の白老、虻田である(児玉他1968:28-89)。なお、地方名、市町村名はそれぞれ同書に記載の通り当時の名称を記載した。静内町は、平成18年(2006)3月31日に三石町と合併し、現在では新ひだか町となっている。

- (5) アイヌ衣服資料は、骨董屋等から購入した例も多く、由来が不明なものが多い。出利葉浩司によると、資料が収集される形態としては、次のような場合が挙げられるとしている。a.所有者からの寄贈。b.所有者からの金銭的購入。c.第三者からの購入或いは寄贈。d.古物商よりの購入である(出利葉1997:91)。なかでも多いのは、b.所有者からの金銭的購入であるとされている(出利葉1997:91)。また、現存するアイヌ資料は、博物館や美術館に展示・保存されているものが多く、現在ではアイヌの人たちの生活の中にはほとんど残っていないのが現状である。佐々木利和は、日本のアイヌ文化財コレクションの欠点として、バックデータが乏しい点を挙げているが、特に基礎的情報の乏しい土佐林コレクションなどに関しても、着実な調査研究により、個々の文化財の地域性などが明らかになる可能性があるとして述べている(早稲田大学文学部考古学研究室編2004:4、5)。このことから、衣服資料の詳細な分析・検討を行う事は、コレクションの資料価値を高めると同時に、伝統的なアイヌ衣服の今後の継承においても重要な研究であると考えられる。
- (6) 北海道史研究者の河野常吉の息子。北海道帝国大学農学部で昆虫学を学んだ。その後、考古学の研究も始め、イオマンテなどアイヌ儀礼に関する研究を行った。また、アイヌ文化研究に取り組んでいた考古学者、文化人類学者であった河野本道は、広道の息子にあたる。さらに、東京大学名誉教授である考古学者の宇田川洋は娘婿にあたる。
- (7) 現在の所蔵先は旭川市博物館である(旭川市博物館編1997)。
- (8) アイヌ関連コレクションの中では、河野コレクションの他に、日本有数のアイヌ民族資料として評価されている児玉コレクション(アイヌ民族博物館、函館市北方民族資料館など所蔵)や、馬場コレクション(函館市北方民族資料館所蔵)、土佐林コレクション(早稲田大学會津八一記念博物館所蔵)などが挙げられるが、国内のアイヌ衣服資料は製作地・製作年代が不明なものが多く、現在の衣服および文様研究においても、この点が最大の難点となっている。
- (9) このことは、児玉作左衛門らが行った調査(昭和39年(1964)7月。その後2回追加調査あり)によると、白老地方のルウンベ(色裂置文衣)の視察で、「…(前略)…また身頃背面の文様は、上半部と下半部が必ず分離している…(後略)…」(児玉他1968:84)と述べられていることから、同様のことが見て取れる。
- (10) 白老に居住するアイヌは、祖先(第一代)のイベニツクルが、日高アツベツから移住した者であるとされている(井戸編1975:99)。日高からの移住の動機については、コタン同士の争いに敗れたことにより、敗軍の酋長が少数の部下を伴って移住したことが始まりである(井戸編1975:99)。また、場

所請負人によって、経営上、散在していた小コタンが海岸に集められ白老コタンが形成され、その後もいくつかの移住があった（井戸編 1975：99）。それ以前に白老に居住していたアイヌは、寛保元（1741）年に、大島の噴火による津波によってほとんどが絶滅した（井戸編 1975：99）。

- (11) 鈴木亀吉は、嘉永4（1851）年、秋田県川口で生まれた。亀吉は通称で、戸籍には亀造と書かれている（旭川市史編集会議編 1994：770）。明治前期頃、開拓使は商人の収奪からアイヌを保護することを目的として交易を規制していたが、上川地方には亀吉などの商人が交易活動をしていたとされている（旭川市史編集会議編 1994：770-771）。
- (12) 児玉らによる調査（昭和39年（1964）2月および9月。その後2回追加調査あり）の、上川地方・近文におけるチヂリ（無切伏刺繡衣）あるいはイヨイミと呼ばれる衣服には、同様の草花形の文様がみられる（児玉他 1968：67,68）。児玉は、これを「カラクサ文」と表現して使用しているが（児玉他 1968：68-70）、本稿では、本州の着物などにみられる唐草文との混同を避けるため、「草花形」と表現することとした。
- (13) 公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編（2017）：『イカラカラ —アイヌ刺繡の世界』茨城県立歴史館の、村木美幸筆においても、文様に関して、製作者によって異なる「魔除け」・「家紋」・「神の目」などといった様々な意味を挙げている（公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2017：194-195）。

引用文献

- アイヌ文化保存対策協議会編（1969）：『アイヌ民族誌』上巻 第一法規
旭川市史編集会議編（1993）：『新旭川市史』第6巻 史料1 旭川市
旭川市史編集会議編（1994）：『新旭川市史』第1巻 通史1 旭川市
旭川市博物館編（1997）：『旭川市博物館所蔵品目録9 民族資料／衣服関係』旭川市博物館
飯田美苗・岡田みどり（1992）：『北の紋様展 稽古館創立十五周年記念特別企画』稽古館
井戸次雄編さん委員長（1975）：『白老町史』白老町役場
金田一京助・杉山壽楽男（1941）：『アイヌ藝術 第一巻服装篇』第一青年社
公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編（2017）：『イカラカラ —アイヌ刺繡の世界』茨城県立歴史館
河野広道著作集刊行会編、代表倉新一郎（1972）：『続北方文化論 河野広道著作集Ⅱ』北海道出版企画センター
河野本道（1997）：「アイヌの衣服資料—その文化的理解のために—」『旭川市博物館所蔵品目録九—民族資料／衣服関係—』旭川市博物館 1-20
児玉作左衛門（1965）：「江戸時代初期のアイヌ服飾の研究」『北方文化研究報告』第20輯 1-105
児玉作左衛門、伊藤昌一（調査員）・児玉マリ、三上マリ子（補助員）（1968）：「アイヌ服飾の調査」北海道教育委員会『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育

委員会 28-88

- 斎藤祥子・藤田和佳奈 (2007) : 「アイヌ衣服と文様」『北海道生涯学習研究 北海道教育大学生涯学習教育研究センター紀要』7 56-66
- 津田命子 (2004) : 「アイヌ衣服と文様の変遷」『繊維製品消費科学』45,12 25-30
- 津田命子 (2011) : 『伝統のアイヌ文様構成方法による アイヌ刺しゅう入門 ルウンベ編』クルーズ
- 出利葉浩司 (1997) : 「博物館民族資料はいかに収集されたか—明治年間に残された外国人の記録から—」『北海道開拓記念館研究紀要』25 67-96
- 北海道開拓記念館編 (1999) : 『北海道開拓記念館 '99 移動博物館 アイヌの装い—伝統と創造—』北海道開拓記念館
- 北海道教育庁社会教育部文化課編 (1982) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅰ旭川地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1983) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅱ)』北海道教育委員会
- 同編 (1984) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅲ静内地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1985) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅳ静内・浦河・様似地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1986) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅴ釧路・網走地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1987) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅵ十勝・網走地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1988) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅶ沙流・十勝地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1989) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅷ鶴川・有珠地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1990) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅸ千歳)』北海道教育委員会
- 同編 (1991) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅹ千歳)』北海道教育委員会
- 同編 (1992) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅺ道南東部地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1993) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅻ道東地方)』北海道教育委員会
- 同編 (1994) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査Ⅼ)』北海道教育委員会
- 同編 (1995) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査ⅭⅣ補足調査1)』北海道教育委員会
- 同編 (1996) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査ⅭⅤ補足調査2)』北海道教育委員会
- 同編 (1997) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査ⅭⅥ補足調査3)』

- 北海道教育委員会
同編 (1998) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査XⅦ補足調査4)』
北海道教育委員会
同編 (1999) : 『アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査XⅧ補足調査5)』
北海道教育委員会
本田優子 (2002) : 「近世北海道におけるアットウシの産物化と流通」『北海道立
アイヌ民族文化研究センター研究紀要』8 1-40
本田優子 (2003) : 「近代北海道におけるアットウシ産出の様相を解明するため
の予備的考察—開拓使の統計資料の整理と分析を中心に—」『北海道立アイヌ
民族文化センター研究紀要』第9号 35-79
本田優子 (2004) : 「アイヌ口承文芸にあらわれる衣服について」『北海道立アイ
ヌ民族文化センター研究紀要』第10号 33-67
本田優子 (2005) : 「近世北海道におけるアットウシ着用の様相」『北海道立アイ
ヌ民族文化研究センター研究紀要』第11号 73-107
本田優子 (2007) : 「樹皮を剥ぎ残すという言説をめぐって—更科源藏の記録に
基づく一考察—」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第13号
15-29
村井不二子・日野伊久子・菊地美知子・谷井淑子 (1989) : 「アイヌ衣服の復元
的調査研究 (1)」学苑 601 26-44
同著 (1990a) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (2)」学苑 608 1-21
同著 (1990b) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (3)」学苑 610 80-99
同著 (1990c) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (4)」学苑 613 98-115
同著 (1990d) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (5)」学苑 614 10-25
同著 (1991a) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (6)」学苑 617 108-123
同著 (1991b) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (7)」学苑 620 38-53
同著 (1991c) : 「アイヌ衣服の復元的調査研究 (8)」学苑 621 16-35
村井不二子研究代表 (1991) : 『アイヌ衣服の復元的調査研究 平成2年度科学
研究費補助金一般研究 (C) 研究成果報告書』昭和女子大学
早稲田大学文学部考古学研究室編 (2004) : 『アイヌ民族の美の世界・土佐林コ
レクション』早稲田大学會津八一記念博物館